日本道徳教育学会神奈川支部　第36回学習会

提案①

「中学校特別支援学級における道徳科授業～役割演技を援用したパッケージユニットの実践～」

新潟県　長岡市立宮内中学校　大橋立明先生

○本実践のきっかけ

R2　年道徳推進教師として、勤務校でのローテーション道徳の開始。
　全学級で年間３５時間以上の、道徳科授業が行われる。

R3　特別支援学級担任から道徳科授業の在り方について相談を受ける。
　（中学校の道徳教材の内容のむずかしさ等）
　→特別支援学級で自身が道徳の飛び込み授業を行う。(「橋の上のおおかみ」「かぼちゃのつる」)
　　役割演技を授業に導入することによって授業、生徒が変化したことに手ごたえを感じる。

○本実践を通して

・提案が全国の中学校特別支援学級における道徳科授業に悩んでいる先生方の参考に一助となればと考える。
・また、子どもの実態に応じた、「個別最適な学び」にもつながっていけばと考えている。

○実践の方向性

・内容項目「友情」を扱い、パッケージ型ユニットの「重層型」を用いる。
・授業の中に役割演技を取り入れ、生徒の教材理解を促す。
・全２回の授業のうち、１回目小学校の教材（くりのみ)、２回目中学校の教材（親友）を用いる。

３　実践の概要

	第１回	第２回
日時	令和４年９月１４日	令和４年９月２
人数	８人 （３年３人、２年３人、１年２人）	６人 （３年０人、２年４人、１
教材名	くりのみ （みんなの道徳１年　学研みらい）	親友 （中学道徳１　光村図書）
内容項目	B-8「友情、信頼」	
ユニットテーマ	友だちとの関わり方について考える	

○第１回実践「くりのみ」について

・ユニットのテーマ「友情」について授業の導入で子どもたちに伝える。
・生徒の実態を考慮して、モデレーション（導入時における、学習テーマに対する話し合い等）は行わなかった。
・生徒の友情のとらえ方は以下のようなものであった
　話し合ったり、遊んだり、気が合うなど、授業の導入ではまだそこまで友情に対する深い捉え方はされていなかったといえる。

４　実践の実際(1)「くりのみ」①

○授業者が、ユニットテーマを「友だち」と伝える。
○「友だちはどんな存在か」と問う。
　・話し合ったり、遊んだりする
　・悩みを相談できる。
　・なぜか楽しい。分からないことを教えてくれる。
　・気の合う仲間。

・くりのみのあらすじ

冬を迎えるキツネとウサギが、食べ物を探しに山へ行く。
キツネは、見つけたドングリをおなかいっぱい食べ、残りを隠す。ウサギは２個しか見つけられなかった「くりのみ」の１個をキツネに与えると、キツネは涙を流す。

・まず教材を読んだ後に、どうしてキツネは泣いたのか？とたずねたところ
「うれしくて」「嘘をついていたから」「ウソ泣き」といったように、教材の本質とずれた意見であった。
そこで役割演技を取り入れた、再び子どもたちに考える場面を設定した。

・教材を読んだ後「ウサギからクリをもらったキツネはどうしたらいいか」と問い、役割演技を行う。
・教師が生徒の演技について解説しながら、どう思ったかを引き出していく。
・生徒たちから出た意見は右のようなものである。このことから役割演技を通して、道徳的価値を深めていけたと考えられる。

・１組目は、キツネがウサギに感謝の気持ちを述べただけであった。
・２組目は、キツネに感謝されたウサギの気持ちを理解した。
・３組目は、キツネがウサギに、隠したドングリを分け与えた。
・４組目も、キツネとウサギがお互いに食べ物を分け合い、うれしそうに見えた。

○第2回実践「親友」について

・中学校の教材である。
・「相手のよさについて考える」ことを授業前に確認する。
・教材の文章を精選し、場面絵を用いた説明をする。
・男女の友情について書かれた教材なので、男らしさ、女らしさについても質問する。
・「たくましさ」や「おしゃべりが止まらない」など男子も女子にもどちらにも当てはまることがある。

・教材のあらすじ

女子の美咲と昼休みにサッカーで遊んでいた男子の健太。休み時間が終わると、健太は他の男子から「どうして女とサッカーするんだよ」と冷やかされる。それを見ていた美咲が「健太、行こうぜ」というが健太は答えない。耐えかねた美咲が黙って教室から出ていくのを健太は追いかける。

○役割演技を通して

・「美咲を追いかけた健太は美咲になんと言ったのだろう？」と生徒に問いかけた。
・教科書で教材を読む時よりも、内容を深く読み取ることができた。
・心に刺さっていた矢が 90%くらい抜けたなど、子どもの特有の表現も見られた。
・しかし一回目の実践「くりのみ」で意見を積極的に言えていた生徒があまり意見を言えなくなってしまったり、演技に入り込めなかったり、恥ずかしさからか少しだれた雰囲気になったりした。

４　実践の実際(2)「親友」⑤

○範読の途中で質問して、道徳的問題場面の理解を促した。
（例）
T：健太は美咲の一言にどれくらい救われたのかな。
A：ガチの親友やん。
B：一億倍。
A：心に刺さった矢が抜けた。
T：心に矢が刺さってたの？
A：多分精神的な。
C：マイナス１００で例えるなら、９０％くらい抜けたと思

○成果と課題

・役割演技を取り入れることで中学校特別支援学級でもパッケージ型ユニットによる授業は実践可能である。また授業をやりたいという生徒の声もきかれた。
・特別支援学級でモデレーションの時間をどのように取り入れていくかは検討していく必要がある。
・学校の規模や、支援の形態によってはどの学校でも実践可能かどうかは、今後も検討していく必要がある。

【質疑応答】

（参会者　質問①）

・今回２時間続きの重層型ユニットの授業を提案されていたが、１時間目と２時間目のつながりを生徒はどれくらい自覚できていたか。

（提案者　回答①）

・授業として生徒は意欲的に取り組むことができたが、前時と本時のつながりはあまりできていなかったかもしれない。

（参会者　感想①）

・学びのつながりを持たせるために、前時の授業の掲示物を貼ったり、発問や声掛けの中に「前時の授業では…」といった一言を入れたりするだけでも、子どもたちが学びの連続性を意識することにつながると考える。
役割演技に関しても、もとはサイコドラマという心理療法から派生した指導法である。学校教育における児童生徒が集団で取り組むことに改めて意味があると感じた。

（参会者　質問②）

・教室には様々な生徒の実態があると思うが、生徒のどんな姿や変容をねらいとして、授業を行っているか。

（提案者　回答②）

・授業の中では、「他者との関り」を最も大切にした。また飛び込みで授業を行う上で、普遍的な「友情」をテーマにすることがよいと考えて、二つの教材を選んだ。

（参会者　質問③）

・１回目の授業「くりのみ」は小学校低学年の教材である。第２回目の授業「親友」は中学校教材であり、「男女の敬愛」をテーマとしている。この二つは関連させるには、内容が飛躍しすぎではないかと感じる。異性の友情ではなく、まずは同性の友情を扱った教材をつかってみてはどうか。二つの教材の選定理由を教えていただきたい。

（提案者　回答③）

・この教材を選んだ一番の理由は、生徒が役割演技をしていくうえで、「親友」「友情」をテーマにするのがよいと思ったためである。しかしもう少し教材の検討をしてもよかったと感じる。

（参会者　質問④）

・特別支援学級の道徳科授業はこれからも考え続けていくテーマだと感じた。先ほどコミュニケーションにおける学びの連続性ということが話題に挙げられたが、生徒の「またやってみたい」という感想は、「課題意識の連続性」ではなく「興味のある活動（役割演技）の連続性」ではないか。

（提案者　回答④）

・生徒が興味をもったので、この二つの授業の後にデューラーの「祈りの手」という教材も試してみた。

（参会者　感想④）
・先ほどの意見を聞いて、生徒が役割演技に興味をまずもち、そこから「学びが継続される」という考え方もできると感じた。

（参会者　感想・質問⑤）
・生徒の実態を考慮すると、中学生でも小学校の教科書教材を使うのもよいと感じる。しかし教科書の使用義務というものがあるのも事実である。情報リテラシーや公共のマナーなど、教材を通しておさえておくべきこともあると感じる。子どもによって、あった教材などを分類・分析することも面白いと感じた。小学校教材、中学校教材の二つを使って、どういう違いを感じたか。

（提案者　回答⑤）
・小学校教材の良いところは、話を読んですぐ理解できる、そのまま使えるという所。登場人物が人間ではなく、動物の方が、役割演技をしやすいという良さもある。

（参会者　感想⑥）
・特別支援学級でもパッケージ型ユニットや、役割演技を今後とも取り入れていただきたい。
２回目の「親友」の実践がうまくいかなかったということだったが、例えば１回目の「くりのみ」の実践で、子どもからでた感想を、この２回目の授業に生かしてみてはどうか。１回目の授業をもとに２回目の本当の友達について考えさせてから、役割演技につなげていく展開などができるのではないか。

（参会者　感想・質問⑦）
・二回目の実践では役割演技中に生徒に照れが出てしまったのではないかということだった。役割演技をしたことでうまくいかなかったこと自体を、逆に発問してみてはどうか。「なぜ、うまく言えないのだろう？」「なぜ主人公はその時恥ずかしがらずに言えたのだろう？」など自身の演技と、主人公の行動のズレを学習に取り入れることも面白いかもしれない。また中学校教材は文章量も多いので、教材の場面を精選して役割演技をさせるという活動は効果的だと感じた。一点質問は、教科書の教材の内容の理解に何分くらいの時間をかけているか。

（提案者　回答⑦）
・話を読ませるのに１０分くらい時間をかけている。

（参会者　感想⑦）
・あらすじの理解に１０分かけると、授業の４分の１を使ってしまうので、自分は授業前に教科書を子どもに読ませるようしている。あらすじをわかった状態で、その先にある道徳的価値について考えさせたい。考える時間が増えることで、より詳細な役割演技ができたり、前の授業の「くりのみ」との違いに気づけたり、「親友」という題名を深く掘り下げることもできるようになると考える。

（参会者　感想⑧）
・提案を聞いて中学生が役割演技を一緒にやるということは意味があると感じた。パッケージ型ユニットで学びをつなげていくために、まずは、二つの授業の意図を教師が事前にしっかりともっておき、そのことを振り返りなどで子どもたちに意識させることが重要ではないか。またモデレーションによって生徒が、問いやテーマを自分たちでつくるからこそ、教材に対してより深く学びたいという気持ちが生まれるのではないかと考える。生徒の課題意識の吸い上げが大切だと考える。

（参会者　感想⑨）
・パッケージ型ユニットの「つなげ方」も色々なに分類がある。その分類を研究してみるのも面白いかもしれない。

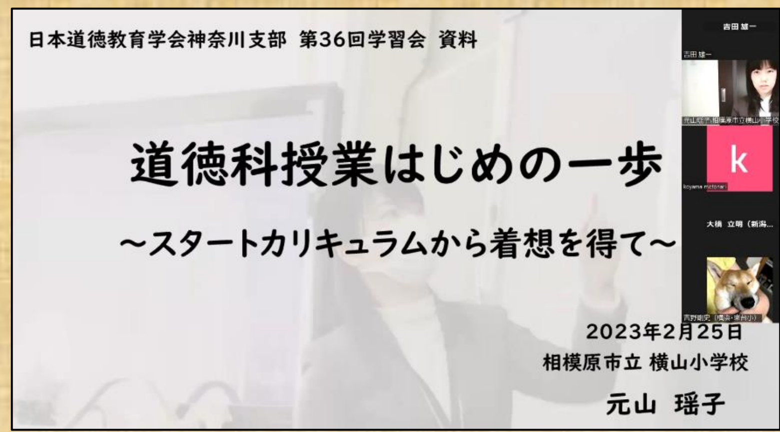
（提案者　感想⑨）
・同じ内容項目であれば効果があるかもという捉えだった。今後、つながりや意図を明確にもつことがユニットの効果を高めることにつながると感じた。

（参会者　感想⑩）
・パッケージ型ユニットやモデレーションは一つの「手段」である。特別支援学級の生徒にとって難しい部分もあるが、やってみてどういう成果があるかを検証していくことが大切だと感じた。最近、小学校の特別新学級の子どもたちが、道徳の授業後にタブレット端末で板書を写真に撮って記録する姿が見られた。これもその子なりの学びの連続性だと捉えることができる。それを見て「板書は誰のためのものなのか」ということを考えなければいけないと思うようになった。

（提案者　まとめ）
・今回提案し、いろいろなご意見をいただいだいたことで、自分が気づけなかったことにも気づくことができた。目の前の子どもたちに今後もよい授業をしていきたいと改めて感じた。

・・

提案②
「道徳科授業はじめの一歩～スタートカリキュラムから着想を得て～」
相模原市立　横山小学校　元山瑤子　先生



〇道徳の授業に対するとらえ
以前は、指導書通り、毎時間授業を実践することで精一杯、子どもの反応が薄い、盛り上がっていたが価値に迫ることができていたか…
といったことで悩んでいたが
↓
同じ発問でもクラスによって反応が違う
一人の発言によってクラス全体が没頭して考える場面がみられる、授業外でも道徳について考える…
といった道徳の面白さに次第に惹かれていった。

〇道徳の授業が苦手な子ども
・楽しくない、何のためにやるかという目的が明確にもてない、答えがないことの不安
→これらの課題から「子どもたちが学ぶ良さや、楽しさを実感できるような授業にしていこう」

〇つまづく子ども
・授業のスピードについていけない、緊張してしまう、みんなと違っていることが怖い…等

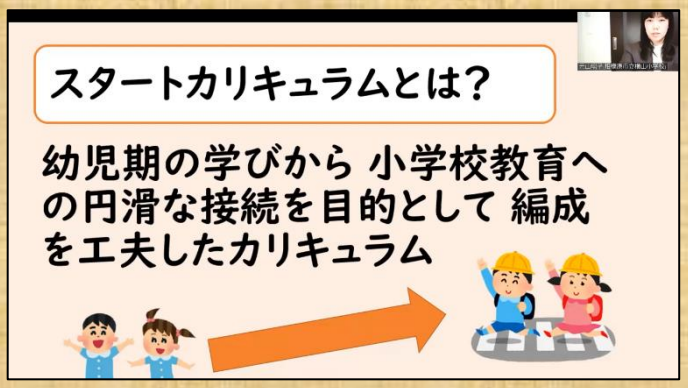
→子どもにとってわかりやすい授業にしていく必要がある。

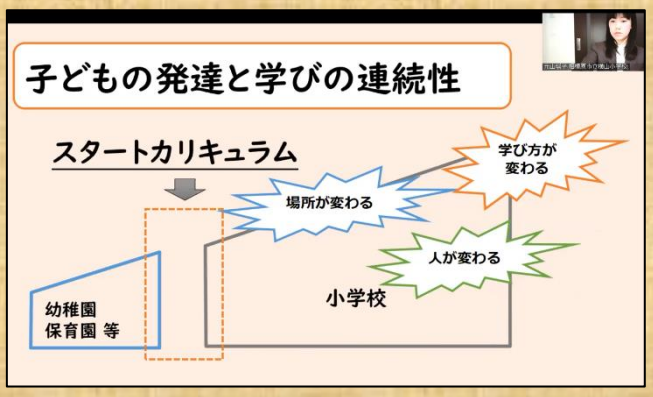
〇道徳科授業が実生活と結びつかない子ども

・困っている人や小さい子に親切にしようと心では思っているが、なかなか行動に移すことができない。

→ありのままの自己を見つめられる状況をつくる、共に学ぶ学級集団を育てる。

以上の課題を解決する一つの手立てとして今回**「スタートカリキュラム」**に注目することにした。





〇横山小学校のスタートカリキュラム

・色別クラス→初めの数週間は月齢に合わせて、クラスで学習をし、学校に慣れてきたところで、通常のクラス編成で学習をする。

・担任は二日ごとに交代し、一年生の子どもたちが全ての担任の顔を覚えられるようにする。

・わくわく集会→歌や遊び、SST、挨拶を学ぶ。

・道具箱や靴箱の使い方を学ぶ。

このようなスタートカリキュラムの理論を道徳科の授業にも取り入れていくようにする。

〇道徳との出会い

・道徳のよさをつたえる

→ともだちと仲良くなれる、新しい考え方を見つけられる、なりたい自分になれるなど

・３つのキーワードを大切にする。

→自分のために聴く、相手のために話す、未来の自分のために書く

・できることから始める

→はじめのうちは考えを書くことはできないが、絵を見て気になったことに〇をすることはできる。その理由を教師がたずねる。

・学びの学級集団作り

→相槌をうつ、本音を言える、対等に語り合える、違いを受け入れられるなど

〇道徳的な価値との出会い～トレーニング期～

・内容項目の意味と自分の生活を結び付ける。（新設とは？あの時〇〇してもらった）

・先生は「教える」立場からはなれる

→先生は「答えを教えてくれる人」ではなく「一緒に考える人」

・授業の流れをつかむ

テーマの提示→テーマに対する語り合い→教材の提示→教材に対する語り合い→共通解→一人ひとりの納得解→ふりかえり…といったように授業の見通しを一人一人がもてるようにする。

（板書も流れに合わせて型をそろえていく）

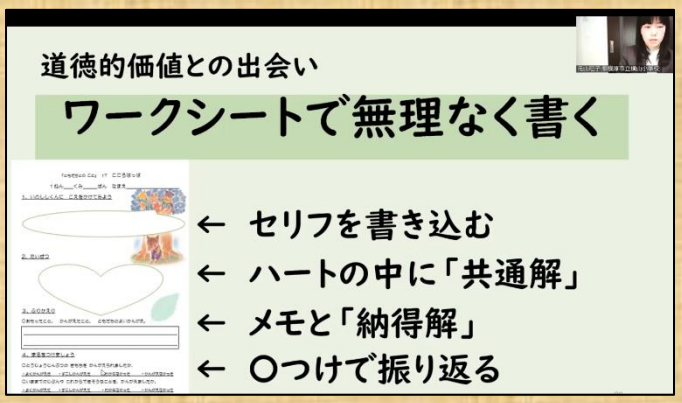
・ワークシートに無理なくなく書く

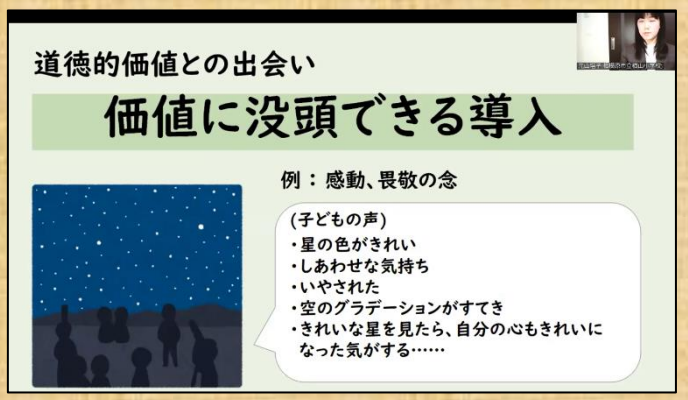
→「言葉をうめる」という意識を減らす。

→登場人物の台詞や気持ちとして書き込む、ハートの中に共通解を書き込む。

・価値に没頭できる導入を工夫する

→内容項目について子どもの言葉でまとめる。





・登場人物の意見を批判せず共感する

→人物を「よい」「悪い」と決めつけるのではなくその行動に至った原因に着目させる。

・身近な例で考える

→「金の斧」という題材が身近でないと感じたら。「金のえんぴつ」を落としたら…と考えてもらうことで子どもたちは身近なこととして考えられるかもしれない。

・役割演技をとりいれる

→低学年児童にとって、体験したことがないことについて考えるのは難しい。まずは役割演技を通して、その状況について考えることから始めてみる。

・一人一人が考える時間をもつ

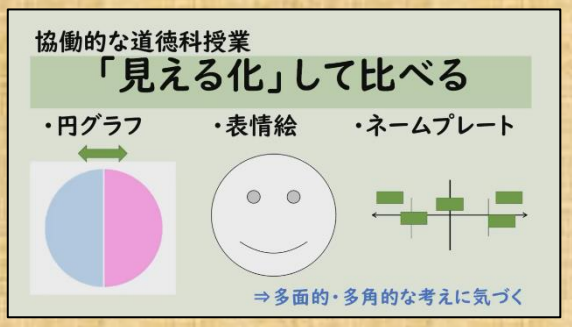
→自分の中の納得解を見つける時間を授業の中に設ける。

〇協働的な道徳科授業のために

・心情円グラフ、表情絵、ネームプレートによって学びを可視化する。

・クラスでかたりあう場面を設定する。

例）ごめんは挨拶じゃない？気持ちのよいごめんなさいというのもあるのかな？



【質疑・応答】

（参会者　質問①）

・色別クラスの期間はどれくらい設定しているか？

（提案者　回答①）

・５月の連休あたりまで。５月からは編成した新しいクラスで学習をしている。ワクワク集会は週１回その後も継続して行うようにしている。

（参会者　感想②）

・スタートカリキュラムの丁寧なプロセスが参考になった。「金の斧」ではなく「金の鉛筆」で考えさせる実践を自分のクラスでも取り入れていこうと感じた。また登場人物の「行動の原因」を考えていくことは、学級経営のトラブル対応にも生かしていける考え方だと感じた。

（参会者　質問③）

子どもの実態に応じて、丁寧に段階を設定されている取り組みだと感じた。一方小学１年生以降の２～６年生ではこの取り組みをどのように継続していくとよいか。１年生でこの取り組みは終わってしまうのものなのか。中一ギャップ、社会とのズレを埋めしなやかな心を育てていくためには、やはりこのようなスタートカリキュラム的な活動が必要なのではないか。

（提案者　回答③）

「心のしなやかさ」という言葉が印象的だった。スタートカリキュラムの取り組みを継続できるように、ワークシートなどは校務サーバーに保存して、昨年までの取り組みを見ることができるようにしている。ただずっと同じことをしているのもよくないので、少しずつ教師の「補助」を減らしていけるような取り組みを考えている。

（参会者　感想④）

提案の中にあった、一年生の子どもたちにはじめに投げかける「友だちと仲良くする、自分を発見する、憧れの自分を思い描く…など」は大人になっても大切なことなのではないかと感じた。それを小１の段階から丁寧にやっていることに価値があると感じた。２年生、３年生…になっても継続して、学年に応じた形でこのようなことを投げかけていく必要があるのだなと感じた。

（提案者　感想④）

大人になっても使える考える癖をつける、自分の未来を切り開くなど、話を聞いて、道徳の授業を通して自分の未来を切り開く子どもたちを育てたいという気持ちをもつことができた。

（参会者　感想⑤）
今回の提案は、道徳科授業だけでなく、「学校生活全般で、道徳の指導をされている」のだと感じた。先生が自らモデルとなって子どもたちに大切なことを伝えてらっしゃると感じた。

（参会者　感想・質問⑥）
学びの見える化など細かな指導を自身も参考にしたい。教師は答えを教える立場ではなく、一緒に考える立場という考え方を大切にしたい。提案の中で「自分のために聴く、相手のために話す、未来の自分のために書く」というワードがあったがこれは言語活動に関するものだと捉えられる。しかし授業そのものが言語活動に制限されてしまうような気もするのだが、どのように考えられているのかを知りたい。

（提案者　回答⑥）
「話す、聴く、書く」これらを授業の中ですべてやることを目的にしてしまうと本末転倒になってしまう。しかし、話すことに没頭できる子、聴くことに没頭でき子というように、子どもの実態によって学びを成長させるポイントはそれぞれ違うので、そのことを大切にしながら授業をしていけたらと思っている。やはりできることから始めるという意識が大切だと改めて感じる。

（参会者　質問⑦）
SST の実践が挙げられていたが、SST の効果は、生活習慣、キャリア教育など様々な要素を含むため、活動のその要素が道徳科の授業に生かされているのかはわからない。一年生にアンケートを取ることは難しいが、発達段階に応じて徐々に分析していくことも可能だと考える。

（提案者まとめ）
話を聞いていただき、自分の実践してきたことの意味が分かった。スタートカリキュラムの一年間だけでなく、この後の数年間も含め子ども成長を見ていきたいと感じた。

・・・

☆「子どもの学びの連続性」を意識されたお二人の先生のご提案とても勉強になりました。
次回新年度のフォーラムも先生方と学んでいきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。